

## 巻頭言

### わがNICUのサブカルチャーを見つめてみよう

広島大学大学院保健学研究科

中込さと子

新生児医療現場は、予想を超えて小さな身体で生まれたお子さんの生命力に揺り動かされたご両親や医療者の「愛:Compassion」や「気遣い:Care」によって発展してきたように思います。まだ手探りの時代には、とにかく一縷の望みにかけ、まずは救命に踏み切る状況もあったでしょうし、「机上の議論でなく現場での経験を重視」することも必然であったろうと考えます。いずれにしても医療技術はそのような過酷な試練や試行錯誤を積み重ねて鍛錬されます。そして各々の経験と実績によって、新生児医療現場の独特の文化、すなわち、サブカルチャーが形成されていくのです。

ところで私たちは自施設のサブカルチャーについてどれだけ言語化できるでしょうか。あるいはスタッフ間で共通認識している事々についてどれだけその根拠を説明できるでしょうか。むしろ初めてNICUに足を踏み入れた親、看護学生や医学生や研修生、新人スタッフの方がその施設の有様を説明できるかもしれない。なぜならば彼らは「土地勘」がないわけですから、まずショックや違和感を覚え、その新しい地に起こっていることを理解しようと、鋭く五感を働かせ、網羅的に観察しているからです。その現場に馴染んでいる私たちにとっては「ごく当たり前」で見過ごしているようなサブカルチャーは、時に外部者に対して脅威やストレスを与え、心身を疲弊させてしまう可能性があることを銘記する必要があります。

それでは常日頃から家族や新人スタッフの声に耳を傾け、自施設の在りようを内省することによって、どのような成果が期待できるのでしょうか。第1に多様な人々を迎える備えとなります。例えば同じ場に居ても、同じ子どもを見ている、居る人の状況によって抱く感情は異なるという前提に立ち、先入観を持たないで個人の経験に関心を寄せることができるようになると思います。「関心」はケアリングの基本です。第2に臨機応変に事を処理する能力の高い組織になります。新しい人や新しい方法、新しい体制を導入するのは一時的にストレスフルです。しかしながら自施設で行っている方針や方法を絶対視しない風土を保つことができれば、風通しの良い、柔軟に変化できる医療の場になり得るのではないかと考えます。

ぜひ、これから生まれてくるお子さんやご家族のために、個性的で感性豊かなNICUづくりをしていきましょう。